

おやすみの前に

佐藤 希美

布団を首まで上げた子供の枕元に座って。

母親はおやすみの前にいつも、子供に本を読んでもくれました。

少しかすれた優しい声に、ぼさりと紙をめくる音。せっけんのおいがする指が、鮮やかな世界が広がるページを開くと、子供は眠かったのも忘れてわくわくしてしまいます。

読み終わるまでけっして寝ようとしないうちに母親は苦笑しますが、子供をたしなめることはありません。昼間には子供をしかる母親も、この時間にはずっとやわらかく笑っているのです。

だから、子供は寝る前のこの時間が大好きでした。

家の本棚に並べられた色とりどりの絵本。その中でも子供のお気に入り、勇敢な男の子が主人公の絵本でした。

ねえねえと、子供は母親にせがみます。

はやく、はやく、あの絵本を読んで？ でんせつのつるぎを引き抜く男の子のお話を！

男の子が勇者さまになるところを！ 竜に囚われているお姫さまを助け出すのを！

母親はそんな子供に笑って、昨日も読んだじゃないと言いながら、端の擦れてきたその絵本をそつと拾い上げるのです。

「昔々、ある村に。一人の男の子がいました。羊の世話をするその子は、大きな夢を持っていました。いつか、この村を出るんだ。それでぎっくざくのお宝を見つけて大金持ちになって、とつてもかわいい女の子とけっこんするんだ。」

ある日、村に王さまからのおふれが届きました。お姫さまが、悪い竜にさらわれてしまったというのです。勇気のある強い若者はいないか。竜を倒して娘を助けてくれたら、娘とけっこんさせて次の王さまとして迎えよう。おふれを聞いた男の子は、竜を倒せる剣がある神殿に向かいました。

神殿には、とても大きくて、赤い宝石のついた、綺麗な剣が置かれていました。男の子が近づくと、宝石がきらりと光りました。男の子は、その宝石に話しかけました。

『僕は、悪い竜を倒しに行くんだ。それで、捕まってるお姫さまを助けて、この国の王さ

まになるんだ。だから、ねえ。君も僕に協力してください』

男の子が手を差し出すと、剣はふわりと浮いて、男の子の手の中にぴたりとおさまりました。持ってみるとびっくりするくらい、軽くて使いやすそうな剣でした。

周りの人は言いました。

『あの剣を手取るなんて、なんて凄いお方だろう！ この方は勇者さまに違いない！ みんな、お姫さまを救う勇者さまが現れたぞ！』

男の子は一人で竜のいる洞窟を目指しました。赤い宝石が光をだして案内してくれたので、場所はきちんと分かりました。途中でかわいらしい子うさぎや、飢えた狐や、強そうな狼に会いましたが、伝説の剣を持った男の子を見るとすぐに逃げてしまいました。そしてどんどん道を進むと、深く暗い洞窟につきましました。

男の子が入り口に行くと、中からゴウツと真っ黒な炎が出てきました。男の子が剣を構えると、炎は剣に当たって消えました。するとズシンと地面が揺れて、男の子は転んでしまいました。地面に手をついた男の子は、洞窟の中からもとても大きな竜が出てくるのを見ました。真つ赤な目の竜は、剣を持った男の子を見て、低くてひび割れた声で言いました。

『なるほど、それを使えば確かに我を殺せるやもしれぬ。だが、その代償は大きいぞ』

それは、男の子に言っているようにも、剣に言っているようにも聞こえませんでした。

男の子は、何も言わずに竜に切りかかりました。体が勝手に動いたのです。

それは、そうげつな戦いでした。竜の炎は、辺りの木を全て焼きつくしました。剣が竜のうろこに当たる音は、国中に響きました。宝石が出した光は、空を真つ赤に染めました。

三日間、竜と男の子は戦い続けました。そして四日目の朝、男の子はついに竜の心臓に剣を突き立てました。竜は、はらはらと崩れて真つ黒な土になりました。それは風に運ばれて、焼かれた地面を覆いました。男の子に、赤い宝石は言いました。

『行け。洞窟の奥に、姫と竜の宝があるだろう』

それが男の子が聞いた、ただ一つの剣の言葉でした。

男の子は剣を地面に置いて、洞窟の奥に進みました。暗かった洞窟の中は、奥に行くほど宝物の輝きで明るくなっていきました。黄金の腕輪、水晶の首飾り。銀と真珠のティアラ。たくさんの宝物に囲まれて、洞窟の一番奥に、とても美しいお姫さまが座っていました。

『あなたを助けに来ました。一緒にお城に行ってくださいますか？』

そう言った男の子にお姫さまはこくりとうなずいて、男の子の手を取りました。

お姫さまとともに洞窟を出ると、そこは一面の真つ黒な大地で、ぼつんと一つ、大きな剣が落ちていました。男の子が近づくと、それはもう赤い輝きを失っていて、男の子が何度呼びかけても答えることがありませんでした。男の子は、泣きました。大きな声を上げて、泣きました。男の子の涙が地面に小さな泉を作るくらいに、泣きました。泣きながら男の子は何も言わない剣を拾って、もうほかの剣を持ってないように、自分の右手を切り落としました。剣はさあつと崩れて赤い砂になって、泉のそばに落ちました。

お姫さまを救いだした男の子を、たくさんの祝福の声が迎えました。男の子の家族は、生きて帰ってきた男の子となくなった右手を見て、泣きながら男の子を抱きしめました。

片腕の男の子はもう、羊の世話をするのができませんでした。ですが、賢くて綺麗なお姫さまとけっこんして、王さまになりました。おきさきさまになったお姫さまに支えられて、平和に、竜のいなくなった国を治めました。

焼け野原になった洞窟のまわりは、植物のよく育つ、黒い豊かな土地になりました。緑の草が茂って、動物たちが集まり、人々は村を作りました。洞窟の前には、魚の住めない小さな泉がありました。澄んだ美しい泉の周りには、一年中真つ赤な花が咲きほこっていました。時々、風もないのに花々が揺れることがあります。するとそれに答えるように、黒い土もさわさわとささめいたのです」

男の子が出なくなった途端に欠伸を شدした子供の頭を、母親は優しく撫でました。子供がこのお話を好きなのは、ただ男の子の冒険にわくわくしているだけだと分かっています。だから、母親はよく子供に言いました。

「大きくなってから、もう一度この本を読んでみなさい。きっと、もつとたくさんことが分かるようになるわ。あなたはまだ、森の動物たちのことも、剣と竜の関係も、お姫さまの気持ちも、土と泉と花の意味も、分からないでしょう？ 泣いた家族の気持ちだって」

土と泉と花になんて、子供は興味がありませんでした。なにも分からないまま、なんとなく子供はうなずきました。そうしてぼんやり考えているうちに、だんだん瞼が重くなって、子供はいつのまにか寝てしまうのです。

ですが。何度も何度も繰り返された習慣が、一度だけ変わったことがありました。

その日、母親は電話をしていました。

電話の内容を子供は知りませんが、とぎれとぎれに聞こえる言葉に、母親の兄が関係していることは分かりました。遠い海の向こうの国に行っているおじさんに、子供は

ほんの幾度かしか会ったことがありません。顔を思い出そうとしてもぼんやりとまって、子供は日に焼けた大きな手を思い浮かべました。

「だから、だから言ったのに……！ そんなところに、行かないでって、私は、やめ、やめって。危ないって、ここにいてって、言ったじゃない！」

母親が涙をこぼしながら叫ぶのを、子供は夢の中にいるような心地で聞いていました。

「ねえ、どうして！ いや、こんなの認めないっ。——兄さん……！」

子供はただ、母親の声を聞いていました。

その夜のことです。母親は電話などなかったかのように、いつものように子供に読んで欲しい本をたずねました。優しい微笑みは、少し、無理をしているようでした。

子供もいつものように、男の子の絵本をせがみました。不自然な母親の姿には気付かないふりをして。

「昔々、ある村に。一人の男の子がいました。羊の世話をするその子は、大きな夢を持っていました。いつか、この村を出るんだ。それでぎくざくのお宝を見つけて大金持ちになって、とつてもかわいい女の子とけっこんするんだ。」

ある日、村に王さまからのおふれが届きました。お姫さまが、悪い竜にさらわれてしまったというのです。勇気のある強い若者はいないか。竜を倒して娘を助けてくれたら、娘とけっこんさせて次の王さまとして迎えよう。おふれを聞いて出発しようとした男の子を、男の子の家族は止めました。『お前がいなくなったら、この羊たちの世話を誰がするんだ。妹の面倒を、誰が見るんだ。危険な竜退治など行かないで、ここで、私たちのそばで暮らしておくれ』

本の文と違う言葉を、子供は不思議に思いました。母親の顔を見上げましたが、母親は子供に目を向けずに話し続けました。

「けれど、男の子は家族の言葉を聞きませんでした。『僕は、僕がやりたいことをやるんだ。だって、お姫さまは竜にさらわれて今も困ってるんだよ？ 誰かが助けてあげなきゃ。誰かが動かなきゃいけないんだ』。そう言った男の子に、男の子の両親も、幼い妹も、なんも言うことができませんでした。」

男の子は、竜を倒せる剣がある神殿に向かいました。そこには、すでに大勢の若者が集まっていました。お姫さまを救おうと駆けつけた、まっすぐな目をした若者たちでした。彼らは順番に剣の元へ向かって、そして抜くことができずに次の人に場所を譲っていました。

た。それでも神殿には多くの若者がいて、剣を使わずに竜を倒そうとグループを作っている人もいました。

『本当に』。列に並んでいた男の子は、聞こえた低い呟きに横を見ました。そこには一人の神官がいて、少し離れた場所で若者たちを見ていました。神官は、辛そうな顔をしていました。視線に気付いてこちらを見た神官に、男の子は尋ねました。

『本当に、どうしたのですか』『本当に、やりきれないと。そう思った』

やりきれない。その言葉は、お姫さまを助けに行くのだと意気込んでいる若者たちの熱気の中では、ひどく似つかわしくないように感じました。

『このように多くの若者が、無為にその身を傷つけると思うとやりきれなくなる。皆、故郷には家族がいるだろうに。耕されるべき畑も、世話されるべき家畜もある。居場所があるものは、その価値に気付かない。自身がどれだけ大切に思われているかを知らない』

『それは、おかしいです。僕には、僕の生き方を選ぶ権利がある。みんな』

男の子の反論は、わあつというどよめきにかき消されました。慌てて前を見た男の子は、剣の傍にいる大きくて強そうな竜に目を丸くしました。そして、竜のそばにいる女の子に気付きました。美しいその人は、この国のお姫さまでした。お姫さまは、よく通る声で言いました。

『私は、皆さまに謝らなければなりません。私は竜にさらわれたものではありません。私自身も竜に、どこか遠くへ連れて行ってくれと頼んだのです』

神殿の中は、しんと静まりかえりました。みんなが見つめる中で、お姫さまはゆっくりまわりを見渡しました。

『私は、王宮にいるのが嫌でした。王宮の中のいろいろなものが、嫌いでした。だから逃げました。自分が楽になるために、竜を頼ったのです。それが私の我侷だと、私を助けに大勢の方が集まってくれていると知って、気付きました。私一人のために、あなたたちを巻き込むわけにはいきません。私の姫という立場には、このように人を動かしてしまう責任があるのだと。そのことがよくやく分かったのです。』

私はこれから、王宮に帰ろうと思います。心配してくれたお父さまやお母さま、お城に勤めているたくさんの方々に、謝ろうと思います。そして皆さま、ご迷惑をおかけしました本当に申し訳ありませんでした』

お姫さまは、深く深く頭を下げました。そして竜につれられて、王宮のほうへ飛んでいってしまいました。

ぼうつとしたまま、若者たちは家へ帰りました。男の子も、羊と家族が待っている、小

さな村に帰りました。少しぼつの悪い気持ちだった男の子を、家族は泣きながら抱きしめました。『帰ってきてくれてありがとう』。そう言われる理由が男の子には分かりませんが、ぎゅっとされるのが心地よかったです。男の子は笑って目を閉じました」

話を終えた母親は、しばらく黙ったままでした。心配になった子供がたまらずに手を握ると、小さな声で母親は言いました。

「……本当に、ひどいことをしたわ。これは、冒流よ。物語に対する、冒流」

子供には、どうしてそんなに母親が自分を責めているのかが分かりませんでした。握った手にぎゅっと力を込めると、母親は子供を抱き寄せました。

「今日のことは、忘れなさい。このお話は、とてもひどいものだから。……自分勝手にもほどがある。だから、忘れて」

子供は、小さく頷きました。母親の髪の毛を頭に感じながら、黙ってされるがままにしています。母親はきつと、とても辛いのだ、と子供は思いました。だから今日は全部言うことを聞いてあげよう、だからこのことは忘れよう。明日なったら、母親は厳しくて煩くてでも寝る前には優しいいつもの母親になって、そうしたら子供も、好きなことばかりして母親から怒られて時々偉いと頭を撫でられる、そんな子供に戻るから。

「——もし」

温かさにとんとしてきた子供の耳に、声が聞こえました。

「もし、あなたが大人になって、この話を思い出すことがあったら……」

母親の腕の中で、子供は眠りにつきました。

子供は成長して、学生になりました。幼い頃好きだった絵本を読み返して、森の動物たちのことも、剣と竜の関係も、お姫さまの気持ちも、土と泉と花の意味も、分かるようになります。

そして子供は、大人になりました。結婚して、子供が出来ました。ある時子供の頭を撫でていると、ふと、母親が一度だけ話したお話を思い出しました。

子供を抱きしめて、心の中でそつと母親に言います。

やつと。あなたが冒流だと言った、あの物語の意味が、分かりました。自分勝手、そうやって私を抱きしめたあなたの気持ちも、本当に理解することができました。

大人はきよんとした子供に笑って、なんでもないよと体を離しました。温もりが失われた時の、どうしようもない喪失感。

絵本を読んでとせがむ子供に付き合つて、大人は色鮮やかなページを開きます。
目を輝かせる子供にかつての自分を重ねながら、大人は絵本を読み始めました。
「昔々、ある村に――」